

心理臨床家訓練生のスーパーヴィジョン体験について

A study of how the trainees of clinical psychologist experience the process of supervision

黒川 こころ

Kokoro Kurokawa

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード : 初学者, スーパーヴィジョン, 職業発達

Key words : Trainees, Supervision, Professional development

1. 問題と目的

現在, 臨床心理士の活動領域は医療, 保健, 教育, 福祉, 産業, 司法など幅広く存在しており, 社会における認知度が上がるにつれその質の向上が大きな課題となっている. 臨床心理士に求められる資質として, 感受性や想像性, 共感性, 自己内省力, 自己理解の 5 つが挙げられている (葛西ら, 2009). これらの専門的資質を身に付ける上で最も重要であると考えられているのは, 指定大学院におけるケース担当実習(以下, ケース), およびスーパーヴィジョン(以下, SV)である. SV は, ケースと並行して行われるため, 心理援助を求めるクライアントの福祉だけでなく, 初学者が専門家としての適性や資質を知り様々な内的体験を経て, 成長, 発達していく上で重要な役割を担っている.

Rønnestad & Skovholt (2003)の臨床心理士の発達段階によると, 大学院生は「初学者期」にあたり, 訓練に熱心であるが, 自信が乏しく不安が強い. 簡単にすぐに使え理論やスキルを習得しようと躍起になるが情報量に圧倒され, 学習がうまく進まないことに苦しみ傾向が強いという.

鱸(2004)は, 初学者への SV の導入について, 一般性と個別性の溝を埋めるための理論的, 技法的訓練だけでなく, 初学者としての自己の内的な問題も含めた関わり全体が SV の対象となると述べている. つまり, 初学者は SV を通して自己の内的な体験を見つめながらクライアントの気持ちを想像, 認知していくものと考えられる.

一方初学者は, 困難なケースに遭遇し, 自己の無力感を体験することによる失敗や, スーパーヴァイザー(以下, SVor)から自己の資質を評価されることへの恐れなどの心理的葛藤を抱えやすいことが明らかにされている.

このように近年初期の発達段階が注目され, その訓練過程や初学者の心理的特徴を明らかにした研究も行われるようになってきた. しかし, 初学者の初期のケースおよび SV 開始前の時点からそのプロセスを追った研究は見られない.

初学者が初期の SV においてどのような体験をしているのかは, その後の臨床活動を大きく左右するものであることは広く認められている.

よって本研究では, SVor との出会いを含めた SV 開始前から SV 終了後までの一連のプロセスを研究対象とする. そして初学者がどのように臨床心理士としての専門性を身に付けていくのか, その主観的プロセスを明らかにすることを目的とする.

2. 方法

<調査期間>2016 年 9 月~11 月

<調査協力者>本研究とは異なる指定大学院修了生 10 名(男性 3 名, 女性 7 名, 平均 25.0 歳($SD=0.8$))
<調査手続き>調査は事前にアンケートに記入を求め, それを基に個別の半構造化面接を行った. 発言内容は同意を得て IC レコーダーに録音した. インタビューの所要時間は平均 46 分($SD=7.9$)であった.

<アンケート項目>①SVor の所属, 協力者との多重関係の有無②SV の形式, 費用, 頻度, 総セッション数, SVor の主たる技法など③ケースの種類④協力者の年齢, 性別

<インタビュー項目>①大学院の学内実習におけるケース担当決定の経緯②イニシャルケース担当決定時のご自身の印象など③学内実習で担当したケースの概要について (イニシャルケースを中心に)④SVor の決定の経緯と SVor に対する印象 (③, ④は同一の SVor 指導に限定) ⑤SV に対する期待

など⑥SV の進め方など⑦SV が役立った点や役に立ちにくかった点など⑧SV 開始前と SV 終了後のご自身の変化について⑨SV 開始前と SV 終了後の SVor との関係の変化など⑩SV 体験からの影響など

<分析方法>得られたデータを逐語化し、M-GTA を用いて質的に分析した。

尚、本研究は平成 28 年度の大妻女子大学生命科学研究の倫理審査委員会の承認を得て行われた(承認番号: 28-012)。

3. 結果と考察

分析の結果、12 個のカテゴリーとその下に更に 12 個のサブカテゴリーが生成された。尚、SV の時期を《 》、カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは< >で表す。

ケース《開始前》の初学者は、ケースを担当出来ることに対して喜びを感じている反面、自己の経験や自信のなさから不安や失敗を恐れるなど

【ケース担当への複雑な心情】があった。またそのような複雑な心情から、目に見えないプレッシャーを感じ【クライアントとの関わりに対する不安や緊張】が生じていた。特に引継ぎケース担当者は前任者との力量の差を意識し、クライアントからの評価を懸念することから、失敗への恐れを抱きやすいと考えられた。このような心理的葛藤は、臨床心理士に求められる資質の一つである自己理解を促進するものであり、初学者にとって必要な葛藤であるとも言えるだろう。

また SV《開始前》の初学者は、【SVor に対して抱く先入観】を持っていた。その先入観は、ポジティブとネガティブの両極端であった。ネガティブな先入観を抱く者の中には SV の受け方が受動的になる者が見られた。一方そのような先入観に関わらず初学者は皆 SV を受けることを望んでおり【SV に対する期待】は、初期ケースに対する不安の強さの表れであると思われた。

《実施中》の初学者は、【ケース要因による困難感】を抱える一方、【SV での臨床的技法の教え】と【SV での情緒的支え】を体験していた。このような初学者の体験は、先行研究と同様の結果であると言えるだろう。【SV での臨床的技法の教え】には 2 つの特徴があり、<SVor の具体的な助言>と<SVor の多面的な見方の提示>であった。また【SV での情緒的支え】は、<SVor からの情緒的サポート>や<SVor からの肯定的評価>を受ける

といった体験があげられた。

つまり《実施中》の初学者は、【ケース要因による困難感】を SV の中で報告し、SVor からの指導やサポート、肯定的評価を受けて、再びケースに臨んでいることが示された。またこれらの指導が行われる際、初学者は SVor の学派や臨床的技法を押し付けられるのではなく【自分の考え方ややり方を受け入れられる体験】をしていた。

以上のような体験を経て《実施中》から《終了後》にかけて、初学者は知らず知らずのうちに【SVor の考え方や技法の取り入れ】を行っており、SV 開始前と比べて様々なことを SVor に相談しやすくなるなど【SVor との心理的距離が近づくこと】を実感していた。

そして《終了後》の初学者は<自分の癖や特徴、資質を知ること>や<基本的な臨床的態度を学ぶこと>、SVor に支えられることでケースを進められること、客観的に見てもらえることの有難さに気づいていった(<SV の重要性・必要性>)。

これらの体験から、初学者は様々な心理的葛藤を抱えながらも SV の中で自己を受け入れられ、認められる体験をすることによって、SVor との関係の深まりを実感していくことが明らかとなった。

つまり、初学者とクライアントの関係を支える裏には SVor との安定した関係があると言えるだろう。このような SV 関係の確立は、SV の初回に限らず、継続して行われていることが重要であると言える。これらの一連のプロセスを経て、初学者は SVor を自己に内在化し、専門的な資質や臨床的技術を身に付けていくものと考えられる。

4. まとめと今後の課題

本研究は初学者の SV について、その開始前の時点から大学院修了までを初学者の視点から追ったプロセス研究である。調査協力者は、個々に異なるケース、SVor の技法的枠組みなどを経験した者でありながらも、共通した体験として本結果が得られたことは意義があると言えるのではないだろうか。また分析方法や調査協力者の枠組み上、個人差を分析することやネガティブなデータの抽出に限界があったことは、今後の課題と言えよう。今後は、個人差を含めた検討および SVor の視点から見た調査、分析も必要だろう。それは、より良い SV 関係の構築を目指す上で重要な研究となるだろう。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所平成 28 年度大学院生研究助成(B)(課題番号 DB2812)より研究助成を受け行った。

5. 助成による発表論文等

①修士論文発表会

[1]黒川こころ, 初学者のスーパーヴィジョンプロセスについて, 平成 28 年度大妻女子大学人間文化研究科修士論文発表会, 大妻女子大学千代田校